

複合名詞の生成

——「～薬(ぐすり)」を中心に——

遠藤裕子

要 旨

複合名詞の生成過程を、「ハゲ薬」を具体例にとり、明らかにした。これは順に、①表現者の中の概念→②「造語」という方式の選択→③「合成」という方式の選択→④「～薬」という型の選択→⑤「ハゲ薬」の選択・確定、となっていると考えられる。また、「名詞＋名詞」型の複合名詞は連体修飾関係がもっとも多いが、その成分間意味関係は「後名詞の語義の一部に情報を付加する働きを前成分が持つ」と一般化することができる。「動詞＋名詞」型についてもこの規則に沿う形で、動詞の名詞に対する文法的関係が決まる。

④の段階では、選択された「～薬」型の他に「名詞＋和語動詞」「～薬」「～剤」などの型があり、それぞれ特徴を持っている。⑤の段階では、「かぜ薬、うがい薬、粉薬」「眠り薬、散らし薬、飲み薬、練り薬、買い薬」などが構成する体系を背景に、最終的に表現者の意図に合致するものとして「ハゲ薬」が選択された。

1. はじめに

本稿は、「～薬」という語を中心に複合名詞を分析し、複合名詞構成成分間の意味・統語関係を明らかにする。そして造語に当たって、修飾される後成分の語義が修飾する前成分との意味・統語関係にどのように関わっているかを述べる。また、この考え方を含む造語の過程、特に「～薬」という語の生成過程を明らかにするものである。

2. 先行研究

複合名詞に関しては様々な角度から数多くの研究がなされている。

ゆもと(1979)では、「名詞＋名詞」型の和語名詞のうち等位(並列)構造と重複構造(疊語)を除くものを、大きく3つに分類している。すなわち、特徴付けのむすびつき、ものとその状態のむすびつき、部分・側面のとりだしのむすびつき、である。そして、前成分が後成分の特徴を指しめす働きをする1番目のタイプがもっとも多くかつ基本的であるとし、これを更に6つのグループに分けた。(以下、括弧内は語例。)①付属物(毛がに)、②かたち・いろ(こうもり傘)、③材質(木戸)、④性質・機能(くず糸)、⑤状況(烏かご、麦畑、山桜、朝もや、かんなくず)、⑥所属さき(背骨)。

玉村(1985)は、複合語の統語構造のいろいろを多くの例とともに詳述している。このうち複合名詞については、「動詞＋名詞」「形容詞＋名詞」「形容動詞＋名詞」「名詞＋名詞」「名詞＋動詞」などが語例の多い型とされる¹⁾。「名詞＋名詞」型の語については、前成分が後成分に関係のある物事を示している場合の意味を次の8つ挙げている。(括弧内は語例。)①主体(酸素欠乏)、②対象(テレ

ビ修理), ③道具・手段 (トラック輸送), ④材料 (ゴムまり), ⑤原因・理由 (事故死), ⑥場所 (山道), ⑦時間 (春雨), ⑧性質など (雨模様)。また, 「動詞+名詞」型の語は, 「～スル名詞, ～シタ名詞, ～ノ名詞」などの意味を持つとしている。

「名詞+動詞」型の複合名詞については, 影山 (1982) が, この名詞化表現が表す意味 (複合語全体の意味) を, 動作・過程・状態, 結果・産物, 動作主・人間・職業, 道具・場所・材料, の4つに大別している。また, 名詞要素の動詞要素に対する文法的・機能的関係を, 主語の編入, 直接目的語の編入, 副詞的表現, として説明するなど, 複数の観点から複合名詞を分析している。王村 (1988) も, この型の複合語の成分間関係を格関係から14挙げている。齊藤 (1989) は, 以下の6つの統語関係を挙げている。(括弧内は語例。) 主格 (崖くずれ), 対格 (こま回し, 穴掘り), 具格 (鉛筆書き), 帰着格 (外国出張), 場所格 (海釣り), 原因・理由格 (おしろい焼け) である。

一方, 石井 (1996) は, 2つの造語成分からなる従属関係の複合語について, 自立形式か結合形式か, 語基か接辞か, 語種, 品詞性, という4つの観点から造語の型の可能性を図表化し, 実際の分布状況を概観した。

いずれの論においても, 複合名詞を把握するには①構成要素の性格, ②構成要素間の関係, ③複合語全体の意味・機能, を分析する必要があるという認識で共通していると考えられる。

また, 全般的傾向として, 「名詞+動詞」型複合名詞の統語関係については多くの分析があるのに対し, 「名詞+名詞」型複合名詞については統語関係・意味関係とも多岐にわたっていることが指摘されるにとどまる。

本稿では, 特定の複合名詞を取り上げ分析することによって, 被修飾成分の語義が語の生成および新造語の解釈に深く関わっていることを述べていく。

3. 「～薬(ぐすり)」の構造と意味

この章では, まず「～^{ぐすり}薬」を後成分として持つ複合名詞を中心に, 意味的に同じ範疇に入る薬の語群の分布状況を形態的な側面から概観する。そして, 「～薬」の構造と成分間の意味関係を明らかにする。

3. 1 「薬」の語彙

ここで言う「薬」とは, 「病気やけがを治すためのもの」を指す。焼き物の上薬や火薬の類などそれ以外の意で使われているものは扱わない。

『類語国語辞典』『広辞苑第五版』を中心に薬の類を表す語を集めて形の上から整理すると, 大きく次の5つに分けることができ, 語例としては下記のようなものがある。(なお, ◇印はモノではなくコトを表す語彙であるが, 参考までに挙げた。)

- | | |
|--------------------------------|--------------|
| 1-a 名詞成分+名詞「 ^{ぐすり} 薬」 | (「～ぐすり」となる。) |
| 1-b 動詞成分+名詞「 ^{ぐすり} 薬」 | (「～ぐすり」となる。) |

2 名詞成分+ (和語) 動詞成分

3 漢語成分+ 「^{やく}薬」4 漢語成分+ 「^{けつ}剤」

5 その他

1-a 赤薬, あぶら薬, 胃薬, うがい薬, かぜ薬, 生薬, 傷薬, 粉薬, 鼻薬, 水薬, 虫薬, 目薬

1-b 売り薬, 置き薬, 堕し薬, かぎ薬, 下し薬, 差し薬, しびれ薬, 煎じ薬, 散らし薬, 付け薬, 塗り薬, 眠り薬, 練り薬, 飲み薬, 吐き薬, 早め薬, 引き薬, 施し薬, 惚れ薬, 笑い薬; 気付け薬, 毛生え薬

2 痛みどめ, 痒みどめ, 吐き気どめ, 酔いどめ, 熱さまし, 毒消し, 虫下し, 虫よけ, 蚊よけ, 毒よけ, 虫おさえ, 蚤とり

3 外用薬, 漢方薬, 漢薬, 丸薬, 奇薬, 偽薬, 去痰薬, 苦味薬, 経口避妊薬, 劇薬, 下薬, 解薬, 皇漢薬, 向精神薬, 口中薬, 膏薬, 合薬, 五薬, 座薬, 散瞳薬, 散薬, 持薬, 主薬, 消毒薬, 常備薬, 生薬, 神薬, 新薬, 睡眠薬, 水薬, 施薬, 仙薬, 煎薬, 適薬, 湯薬, 毒薬, 特効薬, 頓服薬, 壳薬, 秘薬, 媚薬, 便秘薬, 保険薬, 麻醉薬, 妙薬, 名薬, 良薬, 霊薬

◇製薬, 採薬, 点薬, 投薬, 服薬

4 覚醒剤, 緩下剤, 強心剤, 強壯剤, 筋肉増強剤, 解毒剤, 健胃剤, 抗癌剤, 催眠剤, 錠剤, 精神安定剤, 整腸剤, 造血剤, 鎮咳剤, 鎮静剤, 鎮痛剤, 鉄剤, 発毛剤, 粉剤, 麻醉剤, 免疫抑制剤, 利尿剤

◇製剤, 調剤

5 練り^{やく}薬, 胃散, 軟膏, トローチ, 赤チン, チンク油, ビタミン剤, 抗ヒスタミン剤

1a の前成分 (名詞) はほとんどが和語である。語数はそれほど多くないが, 「かぜ薬, 目薬」など基本度の非常に高い語が含まれる。1b は, 和語動詞に「薬」が付く形がほとんどである。「飲み薬」のように日常的な語から「置き薬」のように現在社会慣習としてなくなった古い語もあり, 動詞の意味を知っていても全体の意味が多くの人にとって不明な語もあると思われる。3つの成分から成る「気付け薬, 毛生え薬」は厳密には5のグループであるが, ここに入れた。1の和語名詞には「上薬, 足止め薬」「口薬, 胴薬」など本稿で扱う「薬」以外の語もある。

2の前成分 (名詞) はほとんどが和語である。ここに挙げた以外の語例の可能性もあるが, 網羅できなかった。

3はかなりの数の語がある。前成分の品詞性はいろいろで, 名詞, 「する」を付けて動詞になるものの漢語部分, 造語成分などがあり, 複合語全体の意味が透明なものからかなり不透明なものまでいろいろである。また, 「向精神薬」など3つの成分から成る語も見られる。この漢語名詞にも「指示薬, 爆薬」など医療以外の語が少数ある。

4 は語例が非常に多いので比較的知られているものだけを挙げた。「剤」で終わる語には「界面活性剤, 除草剤, 脱臭剤, 漂白剤, 防腐剤」など病気やけがを治す薬以外の意の語も数多い。「剤」という造語成分は「薬」や「薬」より意味の範囲が広いからである。3 の「^{くすり}薬」と比べると, 前成分が全般的にやや長め(漢字2字以上)で3つの成分から成る語も多くなっている。そのため複合語全体の意味を推測しやすいものが多い。専門的な語や新しい語も多く, 3 と比べると西洋医学の語が比較的多い。

5 に関しては, 単純語や混種語などさまざまで, 型を成すほどにはなっていない。造語という観点からはあまり重要ではないだろう。

以上のことから, 辞書・辞典に登録された主として複合語の「薬」の語彙を見た場合, 一般的傾向として次のことが分かる。

- ①和語成分同士, 漢語成分同士の結びつきが圧倒的に多い。
- ②和語の複合名詞(1, 2)より漢語の複合名詞(3, 4)の方が数が多い。
- ③「^{くすり}薬」型(3)は, 前成分の文法的性質や語の意味分野・文体的特徴などが多様である。
- ④「^{ざい}剤」型(4)は, 比較的新しい西洋医学の語や説明的語が多く含まれる。
- ⑤4つの型に入らない語には, 外来語の単純語, 混種語等様々な語があり, またアスピリンのように特定の物質をさす語も見られる。

3. 2 「薬」の複合名詞の成分間意味関係

ここでは「^{くすり}薬」型複合名詞の成分間意味関係を分析し, あわせて他のタイプの意味関係についても考察する。

前述の1, 3, 4で挙げた語を, ゆもと(1979)や玉村(1985)などの分類のどれに該当するか検討しても, 造語という観点からはあまり意味がないであろう。例えばよく使われる次の4語を分類すると下記のようになると思われるが, 原著者の意図に合致しているかどうか分からない。

	かぜ薬	目薬	うがい薬	粉薬
ゆもと(1979)	状況	状況	状況	かたち・いろ
玉村(1985)	? 性質	? 性質	?	? 性質, 材料, A デアル B

これとは別に玉村(1988)は, 複合語の意味を考える上で重要な因子の一つに「結合契機(連合契機)」があるとして, 次のような例を挙げている。「降る」に対しては「雨, 雪, 雹, 火山灰」などが, 一方「雨」に対しては「降る, やむ, 上がる」などがあり, 従って「雨降り」という複合語は「自然に内発的に形成される可能性」を持ち, 成分同士が「互いに他を志向する必然性を有している」というものである。この説明は, 名詞と動詞が結びついたタイプの複合名詞についてのものと思われる。

一方, Pustejovsky(1995)は, モノの性質を表すものとして「特質構造(構成役割, 形式役割,

目的役割、主体役割)」を設定した。そして、特質構造の生成的な働きの一つとして「選択束縛」を挙げている¹²⁾。「修飾語＋名詞」句で、名詞の特質構造の中からその修飾語に適した意味特性を選択して正しい解釈をもたらすというものである。複合名詞の生成・解釈にもつながるものである。

現に存在する複合語の意味の分析・説明と、新しく複合語が作られる過程および解釈の説明とは、裏表の関係にあると言える。本稿では、「語形→語義」の方向ではなく「語義→語形」という生成過程の観点から検討する。

前述したように、「薬」とは〈病気やけがを治すために使用するもの〉という語義を持ち、また、挙げた複合語は連体修飾関係をなしている。前成分が後成分を修飾するということは、「後成分のある部分を前成分がより詳しく特徴づける」ということである。「～^{くすり}薬」という複合語の場合、①病気やけがに関する情報、②治し方・使い方に関する情報、③モノとしての情報、を前成分が担うとするのが、統語的にも意味的にももっとも自然な解釈である。

この考え方に従って、3. 1に挙げた1a, 1bの語を整理すると以下ようになる。なお、参考のため3. 4の漢語についても、よく知られている語をいくつか挙げた。なお、2の類は統語関係が異なるのでここには挙げないが、「痛みどめ」は「痛みを止めるもの」、「虫下し」は「虫を下すもの」というように、そのような効能(目的)を持つモノの意になっている。

- ① どんな病気やけがに効くのか、あるいは身体の中のどの部分の症状に効くのかに関する情報。(症状、効能、部位など。)

1-a かぜ薬、傷薬、虫薬、胃薬、目薬、鼻薬

1-b 堕し薬、気付け薬、下し薬、毛生え薬、しびれ薬、散らし薬、眠り薬、吐き薬、早め薬、惚れ薬、笑い薬

3 睡眠薬、麻酔薬、便秘薬、媚薬、向精神薬、(経口)避妊薬；良薬、妙薬

4 鎮咳剤、解毒剤、造血剤、整腸剤、健胃剤、免疫抑制剤、精神安定剤

- ② 使い方に関する情報。

1-a うがい薬

1-b かき薬、差し薬、煎じ薬、付け薬、塗り薬、飲み薬、引き薬

3 外用薬、口中薬、座薬、頓服薬、経口(避妊)薬

4 ——

- ③ 形状、材料、など、モノに関する情報。

1-a 粉薬、水薬、あぶら薬、赤薬、生薬

1-b 練り薬

3 丸薬、散薬、水薬、生薬

4 鉄剤、錠剤、粉剤、液剤

- ④ ①～③以外の、周辺語義に関する情報。背景情報。

1-a —

1-b 売り薬, 置き薬, 施し薬

3 常備薬, 持薬, 保険薬, 偽薬, 治験薬

4 —

以上, 1の「^{くすり}薬」型は①～④のどれかに振り分けられることがわかる。3の「^{ぐすり}薬」型は, 「新薬」のように非常に造語力の強い前成分と結合した語や, 「膏薬」のように一般の人には不透明な語など①～④以外の語も見られる。4の「^{くすり}剤」型は, ①が大変多く②と④は見あたらない。

なお, モノとしての情報のうち, 成分・物質をはっきり前面に表そうとすると, ペニシリン, モルヒネ, クレゾールといった個別の名詞になることが多い。これらの語の辞書記述を見ると, 説明文中に「消毒薬に用いる」「鎮痛剤に用いる」といった別の型の語が使用されることも少なくない。

上記のことから, 前成分の後成分「薬」に対する意味関係は次の規則にまとめることができる。すなわち,

前成分が後成分を修飾する関係にある複合名詞, 「名詞+^{くすり}薬」「動詞+^{くすり}薬」では, その修飾のあり方は, 後成分の名詞「薬」の語義の意味特徴によって決まることが優先される。

この規則は, 基本レベルの他の和語についても当てはまると考えられるが, 更に多くの語について検討する必要がある。

3. 3 「^{くすり}薬(ぐすり)」の意味・統語関係

後成分に「薬」を持つ複合名詞の前成分として, 名詞と動詞があることは既に見た。このうち, 1-aの「名詞+「薬」」の意味統語関係については, 前節で述べた。

一般に「名詞+動詞」の複合名詞と違い, 「動詞+名詞」の複合名詞は格関係からのまとまった分析は日本語ではあまり見られない。しかし, 1-bの「動詞+「薬」」については, 統語関係と意味の両面から整理が必要である。語例を, 前成分の後成分に対する意味と文法性(自動詞か他動詞か)とでまとめると, 次の表1ようになる。

表1 動詞+「薬」の分類

	①幼能	②使用法	③形状等	④周辺語義等
自動詞	眠り薬, やせ薬, しびれ薬, 惚れ薬, 笑い薬	—	—	—
他動詞	下し薬, 散らし薬, 吐き薬, 早め薬, 嘔し薬	飲み薬, 塗り薬, 付け薬, 差し薬, かぎ薬, 煎じ薬, 引き薬	練り薬	買い薬, 売り薬, 施し薬

①グループは、「薬デ〈動詞〉」「〈動詞〉タメノ薬」と言い換えることができる。例えば、「眠り薬」は「薬デ眠る」「眠るタメノ薬」,「下し薬」は「薬デ下す」「下すタメノ薬」と言い換えられる。後成分(薬)が「道具」を表す,あるいは,前成分(眠る,下す)が「目的」を表している。①グループの他動詞の場合は,しかし,動詞の対象となる名詞が表現されていない。「下し薬」が「何を下す」のか理解するには,言語外の知識が必要になるわけで自動詞の場合よりやや不透明である。このため,「早め薬」が何の意だか分からず,形容詞「早い」の語幹に「め」が付いた名詞と考える人もいるかもしれない¹³。

②グループは,後成分(薬)が前成分の対象となっている。「薬ヲ〈動詞〉」「〈動詞〉薬」と言い換えることができる。例えば,「塗り薬」は「薬ヲ塗る」「塗る薬」となる。

③の「練り薬」は,「薬ヲ練る」「練った薬」となり,④の「買い薬」は,「薬ヲ買う」「買った薬」となるが,④に関しては周辺語義であり一つに特定されるものではないので関係を一般化することは難しい。

このように,「動詞+名詞」型の統語関係については,「名詞+名詞」型の場合と同様,意味を取り込んだ形でとらえるのが有効である。

4. 「ハゲ薬(ぐすり)」という言い方

「ハゲ薬」という語はあまり一般的ではないと思われるが,雑誌に使用例があるので,ここではまずその使用状況を見,次にそのような造語がされた過程と,あまり普及・定着しない理由について述べる。

表記としては「ハゲ薬・はげ薬」の二通りあるが,基本的に同じ語として論じていく。

4. 1 「ハゲ薬」の使用例

週刊誌の広告で「ハゲ薬」の使用を確認していたので,NICHIGAI/WEB サービス(雑誌記事索引ファイル)で1996年以降(～2001年7月)を検索した。「ハゲ薬(はげ薬)」で検索するとヒット数は0件となるが,「ハゲ」「はげ」と「薬」で検索すると,15件見つかる。この15件中実際には「ハゲ薬」の形で使用されているものが10件ある。(3件不使用,2件は不明。)¹⁴また,総使用回数は34回である。週刊誌などでよく見かける「やせ薬(ヤセ薬,痩せ薬)」での検索は使用が表示されるので,「ハゲ薬」の方は1語として登録されていないと考えられる。

以下にその使用例をいくつか挙げる。(下線は筆者。)

- (1) 米国発＝体験者が驚異の「毛生え日記」公開「私は飲むハゲ薬で2か月半後に毛が生えた！」(週刊ポスト,1998.5.22,見出し)
- (2) 日本人観光客だけが群がる“ハゲ薬”(週刊朝日,1998.8.28,見出し)
- (3) 韓国“驚異のハゲ薬”が日本上陸!(スクープワイド真夏の真実)(週刊現代,2000.7.29,見出し)
- (4) 全米3500万人の薄毛男性たちを熱狂させているのが1月中旬にメルク社から発売された『プロ

ペシア』という錠剤タイプのハゲ薬。(週刊ポスト, 1998.3.27, 本文)

(5) 話題のハゲ薬は, その名も「モリガナ」。韓国語でズバリ「毛が生えてくる」という意味だという。(週刊ポスト, 1998.7.24, 本文)

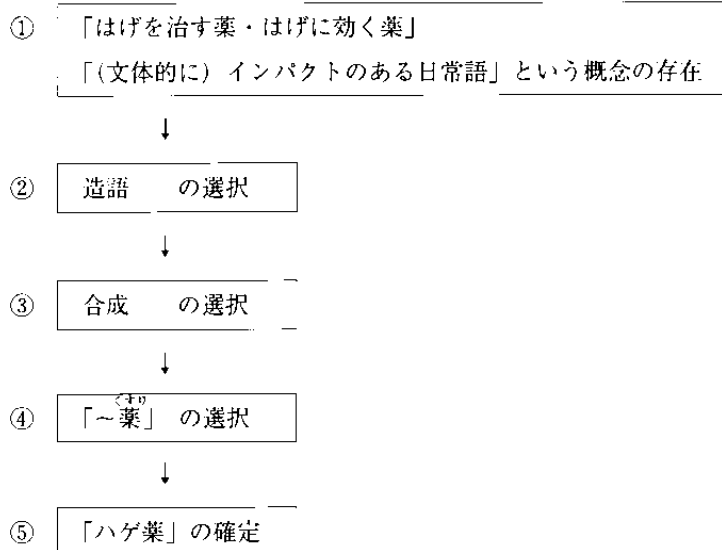
(6) まずは, 塗る「ハゲ薬」から。代表格・リアップを最初に検証しておこう。(週刊現代, 2000.4.1, 本文)

「ハゲ薬」の他, 「ハゲ特効薬, ハゲ治療薬, ハゲ予防剤」「ハゲに効く薬」や「毛生え薬, 男性型脱毛症治療剤, 発毛剤, 発毛促進剤, 育毛剤, 養毛剤, 毛髪剤」等さまざまな表現が使われている。

4. 2 「ハゲ薬」の生成過程

「ハゲ薬」という語の生成過程は図1のようになっていると考えられる。

図1 「ハゲ薬」の生成過程



用例(1)~(6)で分かるように, 「ハゲ薬」という言い方には「ややインチキくさい薬かもしれない」という意味合いと「この語自体が人目を引く」という意図が込められている。まず, 第1段階として, そのような概念が表現者に存在する。(図1の①)

第2段階として, このような概念を言語化しようとした時3つの選択肢がある。つまり, 既存の語の使用, 句表現, 造語, である。意味的に近い既存の語としては, 3. 1や4. 1で挙げた「毛生え薬, 発毛剤, 発毛促進剤, 養毛剤, 育毛剤」などがあるが, これらはあえて使わないという選択がなされている。また, 「薬」という語は, 「咳止めの薬, 肺病の薬, 痺れさす薬, ~に効く薬」(新潮文庫の100冊)といった修飾語を伴う表現が多くあるが, この方法も使われず, 造語, という選択がなされている。「毛の生える薬」という説明的表現より「毛生え薬」「はげ薬」といった複合語の方があ

特定の概念を示す機能を持つ。新たな複合語の使用は、名付けの価値があるとする表現者の判断の現れである。(図1の②)

第3段階。玉村(1985)によると、日本語における造語法としては「語根創造と既存の語彙資材の利用」と2つある。更に後者には、合成、混淆、借用、縮約、文字による方法、逆成の6種あり、「もっとも活発に働き生産的なのは、合成である」としている。ここでも、この合成という方法が選択されている。(図1の③)

第4段階。複合名詞の生成と解釈には、同種の語群の構成する体系に基づく類推が深く関与している。その型は多岐にわたっているが、「薬」に関しては、3. 1に述べたように大きく5つの型(語彙群)が見られる。このうち、3の「^{くすり}〜薬」は最も一般的で文体的にも中立であると考えられるが、それ故特に目立たないとも言える。4の「〜剤」は文体的に専門的な感じが強い。5は特定の型を持たないので、1か2が候補として残ることになり、最終的に1が選択されている。(図1の④)

第5段階。「発毛効果のある薬」「読者の目を引くくだけた表現」という条件に合うことばとして「はげ薬」が造語される。3章で述べたように「はげ」という要素は「^{くすり}〜薬」型の前成分として適切でありそれ故伝達性も高い。表記としては中立的な平仮名ではなく片仮名が採用され、最終的に「ハゲ薬」が選択確定される。(図1の⑤)

①の概念に対して使用されうる数多くの表現の中から「ハゲ薬」を選択・確定するに至る過程は、以上のように考えられる¹⁵⁾。

4. 3 「ハゲ薬」の許容度と定着度

「^{くすり}〜薬」の前成分には名詞と動詞があることはすでに見た。「ハゲ薬」の前成分「はげ」はどちらであろうか。仮に名詞であるとする、「かぜ薬、日薬」などと同じ型に入り、ごく一般的な造語と解釈できる。事実、辞書には名詞として「毛髪が抜け落ちた状態、またその部分。はげ頭、またその人」といった記述がある。「はげという症状に効く薬」である。一方、「はげ」が動詞(の連用形)であるとする、「眠り薬、やせ薬」などと同じ型に入り、やはりごく一般的な造語に見える。しかし、3. 3でまとめたように、これでは「はげる(ための)薬」の意になり、表現者の意図と逆である¹⁶⁾。

形の上からは「動詞+「薬」」型と解釈してもおかしくないのだがそれでは文意が通じないので、この語を名にした人(耳にした人)は「名詞+「薬」」型の意味だろうと結論づけることになる。このため通常の造語より意味解釈までの段階が1つ多い。この、意味特定までの段階の多さがかえって注目度を高め印象を深める効果をもたらすのではないか。実際の用例からもわかるように、造語規則の適用上やや曖昧だからといって薬の効能を誤解する可能性は低く、新造語としてコミュニケーション上許容される範囲と思われる¹⁷⁾。

「ハゲ薬」という複合語は、しかし、多くの人の目に触れる場面ではそれほど定着しないものと考えられる。前成分「はげ」の持つ文体的特徴として揶揄する感じが多少あることと、そもそも身体的特徴に言及することを避ける社会的傾向があるからである。ただ、日常的場面においてはあまり違和感を感じない性・年齢の層があるかもしれない。

5. むすび

以上、複合名詞を造語という観点から考察した。日本語話者が複合名詞を造語する時には、いくつもの段階でさまざまな言語的・文化的な知識を利用している。それは、語による表現と句表現の違いに関する知識であり、造語のタイプと具体的方法に関する知識、問題となっている概念（本稿では薬）と概ね同じ範疇に入る語彙の知識、主たる成分になる個別の名詞の語義の知識、成分間の関係に関する知識、表記に関する知識、などである。それぞれの段階で採用されなかった選択肢は、表現者の意図とたまたま合わなかったために使われなかっただけである。別の複合語が、あるいは造られていたかもしれない。複合名詞の生成をとらえるためには、複合名詞全般に共通する規則性・体系性だけでなく、個別の語の「意味」や「背景」を重視した方がより現実的・効果的であると考えられる。

注

- (1) 活用する語が成分になる場合も、見やすさを優先してもとの品詞をそのまま記した。
- (2) 日本語訳は、松本裕治（1998「意味と計算」『言語の科学4 意味』岩波書店）、影山（1999）から借用した。原語は順に、Qualia Structure, Formal, Constitutive, Telic, Agentive, Selective Binding。
- (3) 安産のための分娩促進剤の意。古い言い方。
- (4) 掲載されているのは以下の10誌である。『週刊ポスト』98.3.27, 98.5.15, 98.5.22, 98.7.24, 98.7.31, 98.8.7, 99.6.4 小学館、『週刊朝日』98.8.28 朝日新聞社、『週刊現代』00.4.1, 00.7.29 講談社
- (5) 商品名「ケフトル」という養毛剤があるが、命名の過程は流れとしては同じであると考えられる。これは「毛」「太る」の意であろう。が、このような造語法は一般的でないこと、片仮名で4拍の語は「2拍+2拍」と解されやすいことから、商品名としては存在し得ても一般の複合名詞としては受け入れられにくいであろう。他に、「クローナル」という育毛エッセンスもある。
- (6) 同じ前成分をもつ複合語でも、「眠り姫」は「姫ガ眠る」「眠っている姫」、「やせ蛙」は「蛙ガやせる」「やせた蛙」の意であり、後成分と意味的に照応する文法関係になっていることがわかる。
- (7) 授業で、複合名詞の一例として「ハゲ薬」をコンテキスト抜きに提示したところ、「日本人なら誰もほげる薬だとは思わない」という学生がいる一方で、「ハゲる薬かと思った」「スキンヘッドの人が毛が生えないように使う薬かと思った」というコメントも見られた。

参考文献

- Downing, P. On the Creation and Use of English Compound Words, *Language* 53: 810-842 1977年
 石井正彦 「複合名詞の構造と機能」『朝倉日本語新講座1 文字・表記と語構成』朝倉書店 1987年
 —— 「語構成」『講座日本語と日本語教育6 日本語の語彙・意味(上)』明治書院 1996年
 影山太郎 「日英語の語形成」『講座日本語学12 外国語との対照Ⅲ』明治書院 1982年
 —— 「形態論と意味」『英語学演習シリーズ2』くろしお出版 1999年
 奥津敬一郎 「複合名詞の生成文法」『国語学』101集 1975年
 Pustejovsky, J. *The Generative Lexicon* The MIT Press 1995年
 斉藤倫明 「語構成Ⅰ, Ⅱ」『ケーススタディ 日本語の語彙』おうふう 1989年
 —— 「和語の造語力」『日本語学』11-5 明治書院 1992年
 斉藤倫明・石井正彦編 『語構成』ひつじ書房 1997年
 阪倉篤義 「語構成序説」『日本文法講座1 総論』明治書院 1957年
 下村文郎 「語彙の研究と教育(下)」大蔵省印刷局 1985年
 —— 「複合語の意味」『日本語学』7-5 明治書院 1988年

ゆもとしょうなん 「あわせ名詞の構造—n + nのタイプの和語名詞のばあい—」『言語の研究』 むぎ書房
1979年

資料

NICHIGAI/WEBサービス（雑誌記事検索ファイル） 1996年1月～2001年7月

CD-ROM版 『新潮文庫の100冊』 新潮社 （1995年）

CD-ROM版 『広辞苑第五版』 岩波書店 （2000年）

大野晋・浜西正人 『類語国語辞典』 角川書店 （1985年）